北欧２カ国をめぐる現代写真事情：フィンランド、デンマーク

中村浩美（東京都写真美術館 学芸員）

NAKAMURA Hiromi
Curator, Tokyo Metropolitan Museum of Photography

北欧２カ国をめぐる現代写真事情：フィンランド、デンマーク

図１　同展招待状

図２　同展カタログ

図５　http://www.helsinkischool.fi/

１．はじめに

2006年５月、ついで2007年９月に北欧のフィンランドとデンマークを訪れる機会に恵まれた。フィンランドは、フィンランド芸術交流基金（FRAME Finnish Fund for Art Exchange）からの招聘プログラムで、ヘルシンキ在住の現代写真作家および写真関連施設等を訪問し取材するため、そしてデンマークは、コペンハーゲン写真センター（Fotografisk Center Copenhagen）[1]との共同企画展「プライベート・ヒストリー（A Private History）」（図１）のための招聘である。ともに、ヨーロッパにおいては小国ながら公的な写真美術館を擁し、また積極的に現代写真作家をサポートする国家として知られている。新たな出会いをとおして、どんな話が聞けるのだろうと、期待に胸をふくらませての訪問となった。

２．フィンランドへの旅

2006年に開催された「私のいる場所（Absolutely Private: On Photography from 2000 to the Present）」展（東京都写真美術館）（図２）は、写真の普遍的なテーマであり、かつ近年では突出したテーマとして取り扱われている感のある〈私性（private）〉に基づいて、現代写真および現代美術の両域で活躍する国内外の作家を紹介した。とりわけ、アンニ・エミリア・レッパラ（Anni Emilia Leppälä）（図３）とエリナ・ブロテルス（Elina Brotherus）（図４）という２人のフィンランド人の女性出展作家には私自身大変興味を持ったとともに、展覧会開催後も関係者や来場者から多くの問い合わせを受けた。彼らは、まったく異なる表現スタイルを持ちながらも、ある共通したバック・グラウンドを持ち合わせていた。それは、ともに〈ヘルシンキ・スクール（The Helsinki School）〉（図５）[2]の作家だということである。

〈ヘルシンキ・スクール〉とは、1871年に創立した北欧最大の芸術系大学ヘルシンキ・アート・アンド・デザイン大学（University of Art and Design Helsinki, Finland）出身の写真家たちをさす言葉である。1980年代にドイツの現代写真界を広く世界に知らしめた〈ベッヒャー・スクール（The Becher School）〉[3]を思い起こさせるが、一連の運動を率いてきた同大学のディレクター（professional director）を務めるティモシー・パーソンズ氏（Timothy Persons）によると、彼が同職に就いた1995年以降、学内の教授陣や大学院生などを中心にヴァーチャルなWEBギャラリー〈TaiK〉[4]を立ち上げ、海外のアートフェアをはじめさまざまなギャラリーや美術館との交流の場を設けてきたとのこと。さらに、前出のFRAMEやフィンランド写真美術館（Finnish Museum of Photography）（図６）[5]、フィンランド－スウェーデン文化財団（Finnish-Swedish Cultural Foundation）、そしてギャラリー・ヒッポリテ（Galleria Hippolyte）（図７）[6]やギャラリー・アンハヴァ（Galerie Anhava）といった協力機関のサポートを得て、一躍世界へとその名が知られるようになったのだという。パーソンズ氏は、

こうも付け加えている。

「北欧の中の、小国の、さらに小さな大学にある写真学科が開いたヴァーチャル・ギャラリーが、今や回線一本で世界中のあらゆる国の人々と情報を共有し、交換し合っている。すごいことだと思わないか？」

確かに、「すごいこと」に違いない。彼らの快挙は、その後ヴァーチャル・ギャラリーにとどまらず、リアルな作品として実際に動き出したのだ。スウェーデンを皮切りにヨーロッパ各地へと、全34作家からなる〈ヘルシンキ・スクール（The Helsinki School）〉という名の巡回展がスタートしたのである。出展作家には、今やフィンランド現代写真界において「巨匠」クラスに位置づけられ、また教授として次世代の作家を育て、導くことにも心血を注いでいるウッラ・ヨキサロ（Ulla Jokisalo）（図８）から、日本でのアーティスト・イン・レジデンス経験があり、日本をテーマにした作品を制作しているアリ・サールト（Ari Saarto）（図９）やリッタ・パイヴァライネン（Riitta Päiväläinen）（図10）、現代美術でも注目されるペルティ・ケカライネン（Pertti Kekarainen）（図11）やユルキ・パランタイネン（Jyrki Parantainen）（図12）、そしてこの時点では新進作家であったエリナ・ブロテルス、さらには若手の注目株とされるアイノ・カンニスト（Aino Kannisto）（図13）、サンナ・カンニスト（Sanna Kannisto）（図14）、サンテリ・トゥオリ（Santeri Tuori）（図15）、サンドラ・カンタネン（Sandra Kantanen）（図16）、ユーハ・ネノネン（Juha Nenonen）（図17）らが名を連ねている。今回は、FRAME側のコーディネートにより、彼らのスタジオをそれぞれ訪問した上で、制作時のコンセプトやポリシーを聞くとともに、旧作から新作まで作品を実見することができた。いずれも、ユニークかつ強烈な個性を貫く作家ぞろいではあったが、驚かされたのは、彼らが生活のための仕事、すなわちコマーシャル関係の仕事をほとんど行っていないことである。フィンランドでは、芸術家育成と保護のために一定の基準（年度によるランク制）を満たした作家には、アーティスト・フィーとして生活費相当額がアーツ・カウンシル・オブ・フィンランド（Arts Council of Finland）より給与される。そのため、このランクを保つ、あるいは超えるための競争率はかなり激しいものの、作家は否が応にも選りすぐられていく仕組みだ。さすが、国家政策として〈テクノロジー〉と〈アート〉を掲げるお国柄である。

ついで、ヘルシンキにあるフィンランド写真美術館を訪ねた。1969年に設立され、1999年に現在のケーブル・ファクトリーと呼ばれる地区に移設された写真美術館は、これまで数々の国際展を開催し、同時にコレクション展示を通して写真文化を啓蒙する拠点ともなってきた。フィンランド教育省とヘルシンキ市の管轄にある当館館長のアスコー・マケラ氏（Asko Mäkelä）によれば、現在全館をあげて、WEB上で全コレクションの閲覧を可能にするためのソフト開発に取り組んでいる最中とのことである。コレクションの総数はプリントとネガを

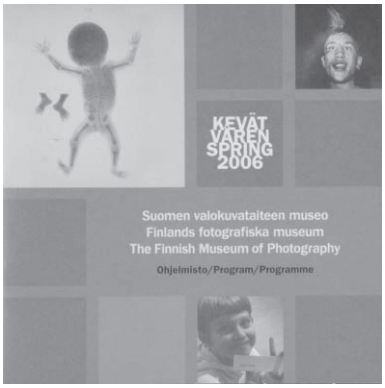

図６　http://www.fmp.fi

図７　http://www.hippolyte.fi

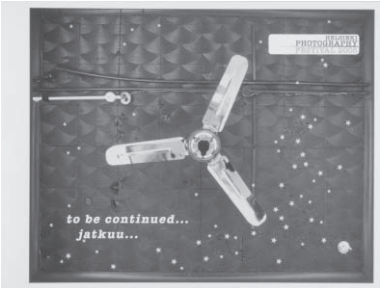

図18　同展カタログ

図19　同展カタログ

あわせて優に350万を超えるという。「そのための作業に日夜忙殺されている」と嘆きながらも、エリナ・ブロテルスの個展や〈ヘルシンキ・スクール〉展など、興味深い展覧会を開催している。また、写真美術館とともに、ヘルシンキを中心とした現代写真の拠点としてあげられるのが、ギャラリー・ヒッポリテだ。このギャラリーは、フィンランド芸術写真協会が創立した、いわば自主運営によるオルタナティブ・スペースであるが、写真展を定期的に開催することのみならず、ヘルシンキ写真フェスティバル（Helsinki Photography Festival）（図18）を主催しており、国中の関心を集めている。そしてもうひとつ、近年では大規模な現代美術展ARS（図19）を定期的に開催し、現代美術としての写真作品を国内外から広く紹介している、1998年に開館した国立現代美術館キアスマ（Museum of Contemporary Art KIASMA）の存在も大きい。

最後に、首都ヘルシンキと連動して、地域に根ざした独自の活動を繰り広げる各地の写真センターを紹介しよう。フィンランドにおける若い写真家たちの教育機関は、ヘルシンキをはじめ南部に集中しているが、写真展や写真フェスティバルなど各種イベントに参加する機会は、今や国中に広まっている。なかでも、東部湖水地帯のクオピオに1982年に設立されたヴィクトル・バルソケヴィッチ写真センター（Victor Barsokevitsch Photographic Center Kuopio）[7]は、もっとも早く立ち上がった。写真家であったヴィクトル・バルソケヴィッチ氏の既存の邸宅と写真スタジオに併設された同センターは、先述の写真美術館同様にフィンランド教育省とクオピオ市の管轄下で、著名な写真家の巡回展を企画したり、フィンランド写真史の調査研究などに従事している。また、北部のオウル写真センター（Northern Photographic Center Oulu）では、北方写真フェスティバル（Northern Photography Festival）を組織しており、すでに大規模なテーマ展を掲げたトリエンナーレの開催地として知られている。その他、タンペレ（Tampere）、ミッケリ（Mikkeli）、トゥルク（Turku）などにもそれぞれの写真センターが存在し、ハリー・キャラハン（Harry Callahan）、ラリー・クラーク（Larry Clark）、マーティン・パー（Martin Parr）、そしてナン・ゴールディン（Nan Goldin）らをゲスト講師とした講演会やシンポジウムも活発に行われている。

3．デンマークへの旅

デンマークは、創設期から欧州連合（EU European Union）への参加を果たし、また唯一ヨーロッパ大陸と繋がっていることから、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドなど北欧諸国のなかでは、経済・文化ともに中心的な役割を果たす国だ。2007年9月後半、「プライベート・ヒストリー」展の準備、設営、プレス会見およびレクチャーのため、コペンハーゲンに到着した。この展覧会は、2006年に開催された「私のいる場所」展をベースにした発展かつ縮小版の企画を、コペンハーゲン

写真センターから依頼されたものである。したがって、テーマの設定はそのまま〈私性〉とし、出展作家は前出の「私のいる場所」展に参加した池田晶紀（Masanori Ikeda）（図20）と原美樹子（Mikiko Hara）（図21）、そして新たに鷹野隆大（Ryudai Takano）（図22）と尾黒久美（Kumi Oguro）（図23）の２名を加えた４名を選出した。いずれも、活動の拠点を国内外にもちながら、それぞれが異なる表現手段を用いて〈私性〉を深く掘り下げた作品を準備し、「写真」という視覚表現をとおしていかに現代社会や世界とコミュニケートするかを試みようとしている作家たちである。おそらく、現地の来館者にとってはいずれの作家も初めての出会いであったに違いない。そのためか、オープニングやレクチャーには予想をはるかに超える人々が集まった。

オープニング当日は、在デンマーク日本大使館大使夫妻をはじめ当地のプレス関係者、写真家、アーティスト、出版関係者らがかけつけ、いわゆる往年の〈ジャポニスム〉（日本趣味）からはほど遠い、ジェンダーのあり方、アニメやマンガなど近年のポップ・カルチャーの影響、あるいは、〈自分探し〉の尽きないゲーム、スナップショットから垣間見る日々の生活の断片といった、現代の日本社会を映し出す作品群を興味深そうに眺めていた。また、後日開催されたレクチャーでは、日本の現代写真を取り巻く環境と当館の活動についてのスライドレクチャーにつづき、各作家が作品のコンセプトや制作時のエピソード、さらにはこれまでの作品のポートフォリオを見せる場としてのアーティスト・トークを行った。レクチャー後には、「日本のマーケット事情はどうなのか」、「コレクターの構成層はどうなっているのか」といった具体的な質問や、写真集の出版状況、検閲の諸問題、そして個々の作品についての率直な感想などが矢継ぎ早に寄せられた。

コペンハーゲン写真センターは、1996年に開設された写真を専門とする独立法人である。理事会は、政界や美術界の知識人によって組織され、シティ・カウンシル（The City Council）と州立芸術文化基金（The State Art Foundation）からの助成によって運営されている。施設概要は、200平方メートルの展示室をはじめ、写真家のみならず一般に開放されている暗室や民間企業（Imacon Scanners）からのサポートによって設立されたデジタル研究室（The Digital Room）、さらに写真に関する専門書や写真集、カタログなどを世界中から取り揃えたブック・ショップが併設されている。こうした付帯施設の充実ぶりから、同センターは、デンマークにおける写真文化の中心的な役割を担っていると言えよう。とりわけ、展覧会の開催事業には重点を置いており、コレクションは持たず、自主企画展をはじめ、国内外からの巡回展を開催することによって、写真家やアーティスト、美術関係者のみならず広く一般の人たちに写真文化の普及・啓蒙活動を続けている。

これまでに開催された展覧会には、デンマークを拠点とする若手の現代作家のグループ展をはじめ、人間の“生と死”にかかわる、タブーとされる領域に踏み込んだ死体写真を撮り、ジョエル＝ピーター・ウィ

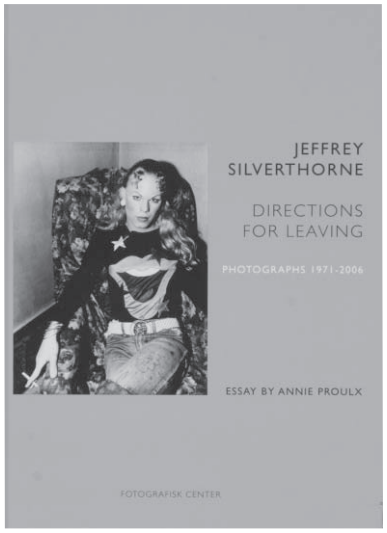

図24　同展カタログ

図25　http://uk.brandts.dk

図26　*KATALOG* 19.2, 2007

トキン（Joel-Peter Witkin）に大きな影響を与えたとされるアメリカの写真家ジェフリー・シルヴァーソーン（Jeffrey Silverthorne）の個展（Directions for Leaving: Photographs 1971-2006）（図24）やオノ・ヨーコ展（Yoko Ono Conceptual Photography 1997）があるほか、昨年開催された川内倫子展など日本への関心度も高い。

デンマーク国内には、公立の写真美術館がふたつ存在する。ひとつは、コペンハーゲン市内にある王立図書館（The Royal Library）が擁する国立写真美術館（The National Museum of Photography）、そしてもうひとつは、オーデンセ市（Odense）のBRANDTSと呼ばれる複合的な文化施設に含まれる写真美術館（The Museum of Photographic Art）（図25）[8] である。コペンハーゲン写真センターのスタッフから紹介を受けて、フュン（Fyn）島にある国内第三の都市オーデンセに向かった。かのアンデルセン（Hans Christian Andersen, 1805-1875）の故郷として知られる古都は、観光客や聖アルバン教会（Alban Kirke）への巡礼者も数多く訪れるという。市街地の中心部にそびえるBRANDTSは、アート・ギャラリーやメディア博物館といったさまざまな文化施設を取り囲むようにショップやカフェ、レストランなどが建ち並び、市民の憩いの場といった趣である。

その一角を占める写真美術館は、1988年に設立された。英語名から察することができるように、「写真」（および機材等）の美術館ではなく、「写真芸術」のための美術館である。他の施設が絵画・彫刻などのいわゆる美術やメディア・アートをカバーするなかで、写真美術館も独自の役割を果たすよう大きな期待が寄せられている。国内外の写真作品の収集に加え、定期的なコレクション展や国際展の開催、作家を対象とした予約制によるポートフォリオのヴューイング、さらにはオーデンセ写真トリエンナーレ（Odense Photo Triennial）も主催しているという。こうした美術館活動を展開する一方で、特筆すべきは、開館時に創刊された写真評論誌『KATALOG』（図26）の主宰である。デンマーク文化省（The Danish Ministry of Culture）の助成を受けた出版事業は、広告を一切排した高質な「写真とビデオの専門誌」（Journal of Photography & Video）として、現在世界23カ国に定期購読者を持ち、デンマーク国内のみならず北欧諸国の写真事情を発信し続けている。

4．おわりに

両国ともに、１週間あまりの限られた滞在ではあったが、振り返ると「写真」「美術」という共通の分母を持つ関係者たちとの出会いは、実に凝縮された、濃厚なものであった。改めて感じさせられたことは、たとえば、写真に限らず、芸術文化の普及のためには、以下の三者による潤滑な連帯関係が欠かせないということだ。

１）作家：創る、発表する
２）観客：観る、買う
３）媒体：伝える、媒介

こうした三者それぞれの役割分担がうまく機能しないと、どんなにすばらしい作家も作品も評価されることがないままに終わってしまう。つまり、観客の目には届かないことになる。そうさせないために、私たちには一体何ができるのか。

私たち学芸員に課せられた役割とは、言うまでもなく作家と観客を媒介する〈媒体〉としての仕事である。常日頃、目の前の仕事にとらわれがちな単眼的なものの見方・考え方は、今回のように海外から日本を見ることによって、俯瞰的な、また複眼的なものの見方・考え方へと変わっていかざるを得なかった。「写真」や「美術」という切り口から、現代の日本に対して疑問を提示し、また異なる文化背景の理解を深めるなど、異国で出会った人々とともにさまざまな問題について考える機会を得たことは、今回のような文化交流がもつ意義についても再認識させられる結果となった。こうした経験を、〈媒体〉としての仕事にいかに効果的に結びつけていくかが今後の課題であろう。

[註]

1）http://www.photography.dk
2）http://www.helsinkischool.fi/
3）デュッセルドルフの美術アカデミー在学中に出会ったベッヒャー夫妻(ベルント・ベッヒャー Bernd Becher 1931-2007、ヒラ・ベッヒャー Hilla Becher 1934-）が、作家として客観的なタイポロジー作品を発表する一方で、1976年以降同校で教鞭を執り、アンドレアス・グルスキー（Andreas Gursky)、トーマス・シュトルート（Thomas Struth)、トーマス・ルフ（Thomas Ruff）といったすぐれた現代写真家たちを育成したことから命名された。「ベッヒャー派」とも呼ばれる。
4）http://www.taik.fi
5）http://www.fmp.fi
6）http://www.hippolyte.fi
7）http://www.vb.kuopio.fi
8）http://uk.brandts.dk